

次の文を読んで、後の問に答えよ。(五〇点)

歌の道の大きに靡れに⁽¹⁾しは、歌合といふもの出で来しよりなり。それ歌は、喜び、怒り、悲しみ、楽しむなどのほどほどにつけてその心を遣⁽²⁾るものにて、人の心の和らげとなすなるを、いかにぞや、かたみに詠み出でてその争ひする、いと浅ましきわざなりかし。またその頃よりは殊に歌のさまも悪⁽³⁾しうなりぬ。

それだにあるに、古き歌直すわざも出で来にたり。これもまたいとむくつけなるや。その詠みたる人、世にあらばこそ、言ひも合はせぬべけれ。⁽⁴⁾それも、己にたよるにしもあらぬ人には、もて出でて言ふべきことにしもあらず。また、己がほどなど詠めらん人の、直せなど言はんには、いと否むべきわざなるを、それには引きかへて、声だに聞くべうもなき古の人の、しかも位高き人、或はよく詠む人の歌をも、おのが心に悪⁽⁵⁾ししと思ふふし直して、われこそよしと思ふらめ、人はまたさも思はぬもあるべし。もとの歌はよくて直したる歌の悪しきが、彼⁽⁶⁾のもとの歌は亡びて直しつる歌のみ残らばいかにぞや。いと歌詠みの嘆くべきわざなめり。既に⁽⁷⁾田子の浦ゆうち出でて見れば真白にそ富士の高嶺に雪はふりける」といへる歌を、後の人の「真白にそ」を嫌ひて「白妙の」とかへ、「雪はふりける」を「ふりつつ」と直せり。目前の景色を詠める歌なれば、「ふりける」とこそ詠むべけれ。「ふりつつ」と言ひぬれば、まだ外に意の含みたる様にて、しかも明らかならず。げに意余りて詞足らざるがごとくなりぬ。また「白妙の」の詞は殊に殊に悪しし。もとの歌の「真白にそ」と言ひしは雪の色を言へること明らけし。かの直しつる「白妙の」の詞はさは聞こえず、富士は色のもとより白きとぞ聞こゆ。いかで富士の色の白かるべきや。この歌はいとめでたき歌なれど、後の人の直したればいと悪しうなりぬ。すべてかく悪しう直したる歌、数多あるべし。⁽⁸⁾ただ古き歌にても悪ししと思はば用ゑずしてありぬべきを、妄りに直してその人の意に違ふのみか、悪しうさへするこそいとあぢきなきことなめれ。

注(＊)

悪しし||形容詞「悪^あし」の終止形の特殊な語形。

田子の浦ゆうち出でて見れば真白にそ富士の高嶺に雪はふりける||『万葉集』に載る山部赤人の歌。「真白にそ」の「そ」は「ぞ」の古い形。この歌は、後世、『新古今和歌集』などの歌集に「田子の浦にうち出でて見れば白妙の富士の高嶺に雪はふりつつ」という形で収められた。

問一 傍線部(1)について、筆者が歌合を「いと浅ましきわざ」だと言うのはなぜか、説明せよ。

問二 傍線部(2)(3)を、指示語が指す内容を明らかにしつつ、それぞれ現代語訳せよ。

問三 傍線部(4)はどういうことか、筆者が挙げる例に即して説明せよ。

問四 傍線部(5)を、「その人」が指すものを明らかにしつつ現代語訳せよ。